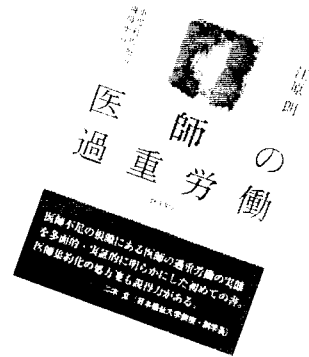


# この一冊



## 「医師の過重労働」

江原 朗 著

勤草書房 本体2500円+税

是正勧告を受けた病院の事例、過労死の事例など近年の状況がまとめられている。

最後の第5章では、これまでの現状分析を踏まえ、小児救急医療を継続的なものにするための提案を行っている。需要面では、電話相談事業の充実や住民運動などによって、不要不急の受診を控えることを提案している。一方で短期の供給増を目指す手段として、小児科の重点化・集約化を行うことによって、マンパワーを集中させ医師が離職しないような配慮を行うことを述べている。

医師不足の問題は、たんに医師養成数を増やすということだけでは全てが解決されるわけではない。それは財源の問題もさることながら、本書でも触れられているように新規の医師養成には約10年の時間がかかり、今ある問題に対応できるものではない。少なくともいからである。さまざまな解決策を組合せることが、この問題の解決に求められることを改めて認識できる一冊となっている。

医師不足の問題については、2008年6月に厚生労働省の「安心と希望の医療確保ビジョン」において医師の総数が不足しているという認識が国としても打ち出され、次いで同月に閣議決定された「経済財政改革の基本方針2008」において、医師養成数の本格的な増加へと方針が転換された。さらに、昨年の衆議院議員選挙において勝利し鳩山政権を発足させた民主党のマニフェストでは、OECD平均の人口当たり医師数を目標に医師養成数を1.5倍にする等の対策が盛り込まれている。大学医学部の定員総数はここ2年間増員されており、来年度も360人が増員される予定となっている。

またこの医師不足問題については、より詳細に見ると地域による違い、診療科の違い等が指摘され、診療科の違いについては、とくに産科や小児科などでの問題が大きいとされてきた。一方で、たんに医師が不足しているということだけではなく、そのような状況におかれている医師(特に勤務医)の労働環境も大きな問題となっている。人数が不足しているからこそ、より労働は過重なものになるといえる。本書は、このような問題が特に大きいとされる小児科医療の状況を中心に、医師の過重労働の実態をこれまでの様々な研究や著者独自の研究から明らかにしたものである。

第1章では、近年の小児の受診傾向を分析し、小児人口は減少したものの、小児科受診数や小児における夜間の受診数が増加していることを示している。第2章では小児科医の動向として、小児科医師の高齢化や女性の割合の増加や、新臨床研修制度による影響、地域差などについて分析されている。第3章では以上のような状況の中で、小児科勤務医の宿日直や労働時間などの労働環境について示し、加えて日本の医師の労働時間が国際的に比較しても長いこと、さらにそのことが医療安全を脅かす可能性についても触れている。第4章では医師の勤務環境と労務管理について、病院における36協定の締結状況や、労働基準法違反により